

## 魏晉代における習禪者の形態(二)

——特に習禪者の神異と神遷家について——

大 谷 哲 夫

魏晉代における習禪者の形態は、梁高僧伝中の、特に「習禪」「神異」の二篇にみられることは周知されている。ところで、それらを総体的にみると、神異僧の多くが習禪し、習禪者の多数が神異を具現しており、それはあたかも、習禪するからこそ神異を現出しているといつても過言ではない。

習禪者における神異という現象面は、印度仏教にみられる所謂六神通に相当するものもみられるのは当然であるが、それらの現象は屢々神遷家のそういつた面と関連せられたり、あるいは、晉書列伝第六十五においては、仏図澄・单道開・鳩摩羅什・曇霍等の事蹟を芸術伝、所謂方伎伝の範疇に入れられている事実を考慮すると、当時の人士は習禪者の神異を神遷家のそれと同様にみていたようである。

そこで、ここでは習禪者の神異と神遷家のそういつた面との考察を試みたい。

習禪者の神異と神遷家とのそれを混同視する傾向は、たと

えば、单道開の伝によれば、「仙を楽しむもの多く来つて諮問」(单道開)している状態であるし、单道開はそれらのものに対して偈を作つて、自分は仏家であつて決して神遷を求めず輩侶ではないと声明しているが、若い頃より栖隱を求め習禪者となつた单道開には、その習禪の形態に神遷の傾向を帯びるのは当然であつたであらうし、それ故にこそ神遷家が去来したのであるとすれば、当時の一般人士ばかりでなく、神遷家ですら習禪ということ自体を神遷方術の一種とみていたのではないかと推察されるところに如実にみられる。

現象面での神異は所謂印度仏教におけるそれと相通じるものがあるのは当然であるが、神異を現出する本質面、たとえば、その修業の場、あるいは食といつた面では、それを神遷家との比較においてみると、習禪者と神遷家両者におけるそれは極めて具体的に相似しているといひうるであらう。

すなわち、習禪者の習禪する場所、神遷家におけるそ

つた場に注意してみると、習禪者のそれは、その大半が、  
常独処<sup>三</sup>山沢、坐禪習誦。

多栖<sup>三</sup>処<sup>三</sup>山谷、修禪定之業。  
(釈浄度) (釈慧嵬)

といった山谷、山沢であるが、そこは「山行すること数十  
里」(竺仏調)とか、あるいは、

晉永和初、遊<sup>三</sup>于江東、投<sup>三</sup>刻之石城山。山民咸云。此中旧有<sup>三</sup>猛  
獸之災、及山神縱暴、人蹤久絶。  
(帛僧光)

といわれるような猛獸の棲息地であり、また

山有<sup>三</sup>孤巖、独立秀出千雲、猷搏<sup>レ</sup>石作梯、升<sup>レ</sup>巖宴坐。(竺曇猷)  
といった、梟崖峻峙している人蹤末踏の深山幽谷のうちであ  
り、習禪者の多くはそういった場所であ  
常処<sup>三</sup>石室中、且禪且誦。  
(釈法緒)

隠<sup>三</sup>居巖穴、習禪為<sup>レ</sup>務。  
(釈法成)

とみられる如く、巖穴を、恐らくは石室としたのだと思われ  
るが、そういった石室において習禪しているのである。

したがって、そのような場所であるからこそ、屢々、  
有<sup>三</sup>猛虎數十、蹲<sup>三</sup>在<sup>三</sup>猷前。猷誦<sup>レ</sup>経如故。一虎独睡。猷以<sup>三</sup>如意、  
扣<sup>レ</sup>虎頭二問。何<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>聴<sup>レ</sup>経。俄而群虎皆去。  
(竺曇猷)

といった、虎と習禪者との挿話が神異の一現象として随処に  
みられるのである。

神遷家におけるそういった場所は、習禪者におけるそれと  
同様であるといつても過言ではないであろう。何故なら、そ

魏晉代における習禪者の形態(一)(大谷)

れは、所謂名山といわれる山岳であり、何故に名山が撰定さ  
れたかという点、名山には芝草・靈草が多く生じるからであ  
り、その他、仙薬に不可欠な材料が豊富であると信ぜられた  
からであり、また石穴・石室の類も多かつたからであろうこ  
とは推定に難くない。

「梁伝」の中でもそういった場所をことさら神遷家と関連  
づけて、

山古老相伝云。是群仙所<sup>レ</sup>宅。高徒衆三百。住居<sup>三</sup>山舎。……  
仙士往々來遊。  
(釈玄高)

といっている。そういった場所は習禪者と神遷家のみが足を  
踏入れることの可能な場所であつたのであろう。

それ故に、「食」ということになること、習禪者の伝に屢々  
みられるように、習禪者はきまつて蔬食することになり、辟  
穀せざるをえない状態となるのである。ある習禪者は、

不<sup>レ</sup>餌<sup>三</sup>五穀、唯食<sup>三</sup>松脂  
(釈法成)

とみられるように、神遷家と同様に松脂を食としていたので  
ある。神遷家における辟穀は神遷たらんとするものにとつて  
は極めて初歩的な方法で、「抱朴子」によれば、それは、身  
体を清腸にし、服氣・胎息して輕拳、白日昇天するための一  
手段であるが、習禪者のそれは単に、単道開の伝にみられる  
ように「山遠くして穀得がたい」(單道開)故にやむをえず  
蔬食・辟穀しているのである。

また、習禪者における卒し方にも神遷家のそれに極めて類似する神異性を見いだす。たとえば、帛僧光の入定して卒し、過二七日<sub>二</sub>後、怪其不起乃共看<sub>レ</sub>之、顔色如<sub>レ</sub>常。唯鼻中無<sub>レ</sub>氣。神遷雖<sub>レ</sub>久而形骸不朽。 （帛僧光）

となる場合、それに類するものとして玄紹・單道開における蟬蛻等々、また、五穀を餌わず唯松指のみを食ひ、巖穴に隠居し習禪を務めとした釈法成の死の

竟合掌而卒。侍疾十余人、咸見<sub>レ</sub>空中紺馬背負<sub>レ</sub>金棺升<sub>レ</sub>空而逝<sub>上</sub>とみられるそれらは、神遷家における尸解仙等に相通じることがある。が反面、五穀を絶つて松脂を食ひ、後に焼身した釈法光のごとき例は、生への執着から軽挙せんと欲望し、白日昇天を願望する神遷家にとつては極めて異質なものに認識せられたに相違なく、またそれだけに、習禪者の形態とその思想的背景とが混然となつて、神遷家に強烈な印象を与えたに違いない。と同時に習禪者の卒し方は、習禪者の神異の中でも、その最たるものであるといえよう。

以上、概略してきたように、魏晉代における習禪者と神遷家は、それを単に形態の上からみれば、習禪者における安般・数息と神遷家における服氣・行氣・胎息等、また、両者における修業の場所、坐法、卒方等々は、似て否なるものはないといつても過言ではない。そこに、習禪者の事蹟を神異とみ、それを神遷方術の一種とみる傾向が現出してきたので

あろうし、そうした形態上の類似性が、両者を混同視する一つの大きな理由であると同時に、梁高僧伝の編者慧高が、仏典の研究講義の極盛な時代、つまり合理的な学僧であり当然所謂学僧達の伝記に主力をそそぎながらも、習禪・神異・亡身僧達の中に神異とした非合理的な現象、つまり神遷方術的説話の多くを記載している事実は、その根底には当時の山林隱逸の風習とか放曠自恣の習、あるいは玄学・清談等々の流行が、その一素因として思考されなければならないが、とにかく、習禪者と神遷家との関連性の深さを如実に物語っているし、同時に当時の人々がこの方面の事蹟に対して如何に魅力を感じていたかということをも示唆しているといえよう。

換言すれば、習禪することによつて神異が現出しうるという可能性と、その神異が極めて神遷方術的な傾向を持つていたところに、全く異質の宗教である仏教が、中国の地に土着し、種々雑多な中国的要素を盛込んだ中国独特の宗教として展開しうる素地があつたともいいうるであろう。

また、神異という、極めて非合理的な現象の面を持つていたからこそ、当時の一般人士に与えうる影響は非常に大きく、また、習禪という形態が後代に飛躍的に発展していく背景ともなつたに相違ない。その間の事情を釈曇霍の伝では、並奇<sub>二</sub>其神異<sub>一</sub>終莫<sub>二</sub>能測<sub>一</sub>。然因<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>仏、甚衆。と如実に伝えているのである。